

北ユーラシアの旧人・新人交替劇

—第6次ウズベキスタン旧石器遺跡調査(2018年)—

西秋 良宏	東京大学教授	
オタベク・アリプジャンフ		ウズベキスタン国立歴史博物館副館長
ルスタム・スレイマノフ		ウズベキスタン国立大学教授
オディル・エンゲシェッド		サマルカンド州立大学教授
バフティヨル・セイフライエフ		ウズベキスタン国立考古学研究所研究員
エレナ・グロディーヴァ		ウズベキスタン国立歴史研究所研究員
仲田 大人	青山学院大学講師	
新井 才二	総合研究大学院大学・日本学術振興会特別研究員	
野口 淳	東京大学学術支援専門職員	

Replacement of Neanderthals by Modern Humans in North Eurasia (VI): The Uzbekistan-Japan Joint Prehistoric Research in 2018

NISHIAKI, Yoshihiro	Professor, The University of Tokyo
ARIPDJANOV, Otabek	Vice Director, The State Museum of History of the Republic of Uzbekistan
SULEYMANOV, Rustam	Professor, National University of the Republic of Uzbekistan
ENGESHED, Odil	Professor, The Samarkand State University
SAYFULLAEV, Bakhtiyor	Archaeologist, National Institute of Archaeology, Uzbekistan
GRODEEVA, Erena	Archaeologist, National Institute of History, Uzbekistan
NAKATA, Hiroto	Lecturer, Aoyama-Gakuin University
ARAI, Saiji	JSPS Research Fellow, The Graduate University for Advanced Studies
NOGUCHI, Atsushi	Project Academic Specialist, The University of Tokyo

1. はじめに

私たち現生人類(ホモ・サピエンス)、いわゆる新人が出現したのは約20万年前とも30万年前とも言われているが、誕生の地はアフリカであった。以後、いつ、彼らがアフリカを出てユーラシア各地に拡散、定着したのか。その際、既に各地に拡がっていた旧人、原人たちとどのように交流、交替したのかは、近年、考古学、人類学において大きな関心事となっている。中でも関心が高いのは、集団間の交雑(混血)であろう。別の生き物のようにも思われていたネアンデルタール人と現生人類が交雑していたことははっきりしてきたし、東アジアを中心に分布していたらしいデニソワ人との交雑も指摘されている。さらには、ネアンデルタール人とデニソワ人という旧人間の交雑も明らかになってきた。この間、彼らはどのように異集団と接していたのだろうか。十分に交流があったはずなのに、最終的に新人だけの世界になってしまったのは、どういうわけなのか。こうした問題は、専門家のみならず一般の方々にとっても興味を惹く課題なのだと思う。

中央アジアはこの研究にとって、注目すべきフィールドである。現生人類とネアンデルタール人、そしてデニソワ人など複数の集団が接触した可能性のある地域だからである。加えて、近年、新人の北ユーラシア進出の時期が問題になり始めた。従来、アフリカからアジアへの現生人類拡散はアラビアからインド経由のいわゆる南廻りルートが先で、レヴァントからヒマラヤ山脈の北に向かう北廻りルートは遅れたのではないかとされていた。ところが、2018年になってレヴァント地方南部には約20万年ほど前に既に現生人類がいたことが明らかになり、さらには、その人骨ともなっていた石器群と類似した石器群は中央アジア方面にまで分布していた可能性が高いことが確認されつつある。

要するに、中央アジアにおける新人・旧人交替劇にかかわる研究は、新局面を迎えている。筆者らは2012年の下見に引き続き、2013年からウズベキスタンで本格的な先史時代遺跡調査を開始した。上記の研究に貢献することを目的としたものである。この間、いくつかの進展があったが、現在では新たなフィール



図1 2018年の調査地域



図2 カイナルカマル岩陰近景



図3 カイナルカマル岩陰C区発掘風景

ドを策定すべく、ウズベキスタン南部において現地調査を続けている。2018年は8月に3週間、マチャイ渓谷においてカイナルカマル岩陰の発掘と周辺遺跡踏査を実施した。その概要を述べる。

2. カイナルカマル岩陰の発掘

現在主たる調査地としているのは2015年に調査を開始したマチャイ渓谷である(図1)。この渓谷は、ウズベキスタン南部、テルメズ市の北方約120 kmにある。標高は1300 mから2000 m超にわたる。ここを選定したのは、1930年代に発掘され保存良好なネアンデルタール人化石を出土したことで著名なテシクタシュ洞窟が所在していることによる。同様の洞窟が他にも残っている可能性があると考えた。

2015年の踏査では十数カ所の洞窟を踏査した。その結果、見つけたのがカイナルカマル岩陰である。幅は約70 m、奥行きは最大で約5 mある。タンゲ・サ

ルトという峡谷の水源に面しており、岩陰前のテラス直下には今も、湧き水がみられる(図2)。おそらく過去においても水場とシェルタが得られる場所として利用されていたと思われる。実際、2015年から2017年までにトレンチA、Bを発掘したところ、中石器時代から古典時代にいたる居住痕跡が連続と重なっていることがわかった。これらは、目指す旧人・新人交替期よりは新しいが、4 mほど掘り下げてもまだ基盤にはいたっておらず、今後の発掘によってさらに古い文化層が見つかるかもしれない。しかも、中石器時代層からはいくつか中期旧石器時代ルヴァロワ標本に酷似した石器が出土したことから、その時代の文化層が岩陰のどこかに埋もれている可能性が示唆されている。

2018年に発掘したのはC区である。幅は2 m、長さ8 mのトレンチを設けた(図3)。この岩陰の西端近くに位置している(図3)。結果を述べると、深さ4.8 m



図4 カイナルカマル岩陰出土細石器

まで掘り下げたが、確実な旧石器時代の堆積には到達しなかった。基盤にも達していない。しかしながら、全く攪乱のないきわめて良好な中石器時代～古典時代の連続的文化堆積が得られた。当岩陰中央部にあるフィッシャーから落ちる滝水、崩落石の影響が全くないことがその大きな理由であろう。堆積の上部約1m、青銅器時代の地層までは土器が出土したが、それ以下の3m超の地層は全くの無土器であり、出土する遺物は押圧剥離で製作された細石器、細石刃が主であった(図4)。最下部からも押圧剥離細石刃が出土した。押圧剥離技術は2万年前をこえる後期旧石器時代に東北アジアで出現し、その後、約1万年前に西アジアにまで拡がってきたとされる。しかしながら、中間にある中央アジアのデータが希薄であって、この拡散シナリオに疑義をはさむ研究者もいる。カイナルカマルでしっかりと押圧剥離石器群出現年代が確定できれば、重要な貢献をなすこととなる。

3. 周辺遺跡の踏査

マチャイ渓谷の右岸はほぼ砂岩帯、左岸は石灰岩地帯となっている。洞窟が発達しているのは左岸である。左岸は急峻で1~2キロ進めば700m以上の高低差をみせる。したがって、渓谷への支流は深い刻みをなす。今年度は、2015年には訪れなかった調査地西端の谷を調べた。

その結果、イルキー・ヨトグチという洞窟遺跡を同定することができた(図5)。開口部は幅が48m、高



図5 イルキー・ヨトグチ洞窟近景

さ4m、奥行きは6.5mあった。標高は約1950mである。涸れ谷の河床部からの比高は6.5mほどしかないが、これは、下流に落石があって堆積物が谷を埋めているためと考えられた。1m×2mのトレンチを設けて試掘したところ、三つの地層が識別できた。第一層は家畜の糞層、第二層が石灰岩礫を含む茶褐色土層、そして第三層が比較的均質な黄褐色土層である。地表下約3mまで掘り下げたが、第三層が2m以上連続し基盤にはいたらなかった。遺物が出土したのは第二層である。青銅器時代らしい土器片、石器が出土した。第三層は無遺物であった。

旧石器時代層があるかどうかはさらなる発掘を待たないと判断できない。しかしながら、当面、青銅器時代文化層が見つかったことは興味深い。というのは、この洞窟に向かう山麓部、標高約1650mのところでもクルガン群が見つかったからである。土器片などは採



図6 テシクタシュ洞窟近景

集しなかったが、この地域一帯における青銅器時代集団の土地利用を調べることに寄与するかも知れない。

さて、本年度は支流をもう一つ踏査した。テシクタシュ洞窟のある峡谷である。この洞窟は実際には三つの洞窟からなっており、ネアンデルタール人骨が出土したのは第一洞窟である。ここは2105年にも訪れているのだが、当時の報告会原稿(2016年春)では第三洞窟の写真を掲載してしまった。今回、改めて、正しく第一洞窟の写真を掲載する次第である(図6)。この機会に写真測量も実施したところ、洞窟内部の堆積物はほとんどが発掘済みであることが確認できた。ただし、大量の土砂が洞窟前の谷斜面にたまっていることも確認した。発掘時の廃土であろう。その調査によっては、80年前はわからなかった問題の解明に役立つかも知れないとの期待もいだかせた。

4. おわりに

今回発見したイルキー・ヨトグチを加えると、マチャイ渓谷では20ほどの洞窟を記録したことになる。確実な旧石器時代遺跡は、現状ではテシクタシュ洞窟のみである。アミール・ティムール、テシクタシュ第二洞窟にも若干の旧石器包含層があるとされているが、2015年の我々の調査によれば、偽石器が主であるようにみえた。良好な洞窟遺跡がなかなか見つからない理由の一つは、活発な地殻運動による岩壁崩壊であろうと思う。現に、カイナルカマルに向かうために2017年まで利用していたタンゲ・サルト峡谷は、岩壁崩落のため通行不能になっていた。同様の崖崩れはマチャイ谷左岸でも複数目にした。このような状況にあっては、新洞窟遺跡の発見は容易でないように思わ

れるが、未確認の洞窟がまだ多数、残されていることも事実である。もうしばらく、探索を続ける所存である。

同時に、既知の遺跡の調査もすすめていきたい。カイナルカマル岩陰では細石器出土層がさらに下層に続いているから、基盤岩にむけて発掘を継続し、旧石器時代文化層の有無を確認せねばならない。また、テシクタシュ洞窟については、ウズベキスタン国立歴史博物館にて1930年代出土品の再調査を開始した。当時はおこなえなかった方法による遺物分析を試み、この重要遺跡のネアンデルタール人文化につき新たな光をあててみたいと考えている。

2018年度の現地調査は文部科学省科学研究費補助金新学術領域『パレオアジア』・研究計画研究「アジアにおけるホモ・サピエンス定着プロセスの地理的編年的枠組み構築」(課題番号16H06408、研究代表者：西秋良宏)によって実施した。

■関係文献(昨年分に追加)

- ・ Nishiaki, Y. O. Aripdjanov, A. Rajabov, B. Sayfullayev, H. Nakata, S. Arai, and C. Akashi (2018) Prehistoric caves and rockshelters in the Machay Valley, Surkhandarya, South Uzbekistan. *Rafidan* 39: 31-41.
- ・ Nishiaki, Y. (2018) Emergence and development of pressure debitage in Central and Western Asia. Paper presented at the 9th Conference of the Asian Paleolithic Association, Denisova Cave, Altai, 30 July-6 August, 2018.
- ・ Nishiaki, Y. (2019) New data on the Neolithisation of Central Asia. Paper presented at *International Seminar on Archaeology of Central Asia*. Bioarchaeology Research Center of Vilnius University, Vilnius, 14-15 January 2019.
- ・ 西秋良宏(2018a)「先史シルクロードのネアンデルタールとホモ・サピエンス」『シルクロード新世紀』岡山市立オリエント美術館・古代オリエント博物館編：22-23。
- ・ 西秋良宏(2018b)「東京大学のユーラシア調査」『シルクロード新世紀』岡山市立オリエント美術館・古代オリエント博物館編：184。
- ・ 西秋良宏(2018c)「中期旧石器時代前半における新人の北ユーラシア拡散可能性について」『日本旧石器学会2018年度総会・研究発表』早稲田大学、2018年6月23-24日、予稿集。
- ・ 西秋良宏・O. アリプジャノフ・R. スレイマノフ・O. エンゲシェッド・仲田大人(2018)「北ユーラシアの旧人・新人交替劇—第5次ウズベキスタン旧石器遺跡調査(2017年)」『第25回西アジア発掘調査報告会報告集 平成29年度 考古学が語る古代オリエント』日本西アジア考古学会編：58-61。
- ・ 西秋良宏・北川浩之・田村亨(2018)「中央アジア中期旧石器時代編年の諸問題」『文部科学省科学研究費補助金・新学術領域研2016-2020：パレオアジア文化史学第6回研究大会』東京大学理学系研究科、2018年11月17-18日、予稿集：11-12。
- ・ 西秋良宏(2019)「カシュカダリヤ渓谷、アンギラク洞窟の発掘調査」『天山山脈から古日本列島へ：ユーラシア広域編年の可能性』国武貞克編：31-40。奈良文化財研究所。